

原 著

教育と福祉の人間学
—ペスタロッチーにおける「道徳的自立」の哲学を中心に—

Die Antholopologie in der Erziehung und der Wohlfahrt
: Die Philosophie der "sittlichen Selbstätigkeit" bei Pestalozzi

光田 尚美

要約：人間を対象とし、その在り方や生き方に深く関わる営みを考えるとき、人間をどのような視点で捉え理解するのかという問いはその生命線でもある。本稿は、教育と福祉という人間存在を支える営為の根底にあるべき人間観について、ペスタロッチーの思索に拠りながら論じ、彼の人間観からどのような示唆をえることができるのか、それが教育と福祉という営為においてどのような意義を持ちうるのかを評価する。

「内的醇化」による「道徳的自立」という、ペスタロッチーに固有の人間発達の原理に着目し、「道徳的自立」が他者との互恵的関係に基づいた究極の自己実現であることを明らかにするとともに、かかる論理が社会福祉の動機にも通底することを指摘した。

Key Words：人間の本質（自然）、実存的危機、内的醇化、道徳的自立、互恵的関係

はじめに

小川未明著『赤い蠟燭と人魚』⁽¹⁾には、蠟燭屋を営む老夫婦が登場する。彼らはお宮で見つけた異形の赤子を神のお授けとして大切に育てるのであるが、ある時、言葉巧みな香具師の誘いに乗り、大金と引き替えに人魚を売ってしまうのである。せめてもの恩返しにと蠟燭に絵を描き続ける人魚の心尽くしも「許してくれ」との懇願も老夫婦には届かず、人魚は鉄格子のはまった箱に入れられ、南の国へと売られていく。

『赤い蠟燭と人魚』は大正10年、東京朝日新聞にて連載された。時代は、鈴木三重吉による「赤い鳥」⁽²⁾の創刊をはじめとする児童雑誌の全盛であり、『赤い蠟燭と人魚』もまた子どものための童話として編まれたものである。しかし未明の作品は、人間社会の現実を感傷的に、また上品に表現した「赤い鳥」の作品群とは一線を画するように思われる。というのも、そこには人間の善や正義を一層輝かせるように、人間の罪や醜の姿がリ

アルに描き出されているからである。

なるほど未明の作品の真意は、善や正義の勝利を謳うことにあるのかもしれない。物語を通して子どもたちは、人魚の情愛に同情し、その真っ直ぐな正義感でもって老夫婦の仕打ちを糾弾するだろう。しかし、そこで考えることがある。われわれは彼らを、ただ<悪人>として裁くことができるのか。

老夫婦は人魚を神のお授けとして育てた。それを売ることは罰が当たると、香具師の申出を何度も退けた。彼らは善良で信心深い人物なのである。ところが「人魚は不吉である」という香具師の言葉と大金に心を奪われ、ついには人魚を売り渡してしまう。異形の姿や不思議な力は、いまや忌むべきものとなってしまったのである。神仏への信心が、その恐ろしさを際立たせたのかもしれない。

そのように考えると、老夫婦のごとき人間は特異な存在であるとはいえないのではないか。薄情に見える心変わりも鬼のようになってしまった心持ちも、むしろ<普通の>人間に潜んでいる一面に過ぎないのではないだろうか。

2009年12月4日受付／2010年1月20日受理
Naomi MITSUDA
関西福祉大学 社会福祉学部

このような人間とは何か。スイスの教育家ペスタロッチー (Pestalozzi, J.H., 1746 ~ 1827) は『隠者の夕暮 (Die Abendstunde eines Einsiedlers, 1780)』の冒頭で「人間とは何か」と問いかける。そして晩年の『白鳥の歌 (Die Schwanengesang, 1826)』に至るまで、人間本質を探究し続けた。

ペスタロッチーのまなざしが映し出したのは、しかし、模範的な人間というわけではなかった。例えばそれは、困窮する家族が待つにもかかわらず借金を重ねてしまう父親であり、不実な男に絶望して子殺しという罪を犯してしまう少女であり、街路に放置されて盗みや詐欺を繰り返す少年であった。彼らはその行為において非難されて然るべきである。それでは彼らは<悪人>なのか。ペスタロッチーはそう捉えてはいない。彼らはただ、抜け出しようもない貧困や無知にあって迷い、苦しんでいるのである。

このような最下層の放置された人々を通して、ペスタロッチーは人間本質の根源的な弱さや危うさを見つめ続けたのである。しかしながら彼は、決して悲観することはなかった。「最も貧しい見捨てられた子どもたちにも、神は人間性の諸力を与えられた。その力を私は信じていた」⁽³⁾。このような確信が彼を支え、貧児や孤児など、まさに人間性の危機にある子どもたちの救済へと駆り立てたのである。

人間を対象とし、その在り方や生き方に深く関わるような営みを考えるとき、人間をどのような視点で捉え理解するかはその生命線であるともいえる。そこで本稿は、教育と福祉という人間存在を支える営みの根底にあるべき人間観について、ペスタロッチーの思索に拠りながら論じたい。彼の人間観からどのような示唆をえることができるのかを指摘し、それが教育と福祉という営みにおいてどのような意義を持ちうるのかを評価したい。

1. 人間の本質の弱さや危うさへのまなざし

(1) 人間の自然の奥底にあるものへの信頼

近代ヨーロッパを代表する教育家の一人として、ペスタロッチーもまた人間の根底に普遍的な陶冶可能性を見出していた。なるほど身分や職業の制限を超えての知性の獲得という点において、彼の論には啓蒙主義の影響をみとめることができる。しかし奥平も指摘しているように、ペスタロッチーの人間観は啓蒙主義の潮流を安易に肯定するものではなかった⁽⁴⁾。

『隠者の夕暮』において、ペスタロッチーは次のよう

に述べている。

「人間をその境遇において幸福にする知識の範囲は狭い。しかもその範囲は、彼の身のまわりから、彼の本質から、彼の最も近い人間関係から始まり、そこから拡大していくのである。そしてそれがどのように拡大していく場合でも、知識の範囲は、真理のあらゆる浄福力であるこの中心点にならって整えられなければならない」⁽⁵⁾。

このような思想界は、シュプランガー (Spranger, E.) によって「生活圏 (Lebenskreis)」として説明されている⁽⁶⁾。それは人間の身近な関係である家庭生活から始まり、身分や職業、さらに国家という広範な関係へと拡大する外的層と、人間の内部へと向かう内的層とを併せ持つところの同心円的図式でもって描き出されている。

それでは人間の内的世界の中心であり、その本質の奥底にあるものとは何か。『隠者の夕暮』において、それは「汝の本質や汝の諸力の内的感情 (das innere Gefühl deines Wesens und deiner Kräfte)」⁽⁷⁾ や「単純と無邪気の純粹な感覚 (reiner Sinn der Einfachheit und der Unschuld)」⁽⁸⁾ と示されるころの人間の自然 (Natur) であり、その「感情」や「感覚」がすべての認識、道徳、信仰、人間関係、生活を基礎づけると考えられている。『隠者の夕暮』によって描き出されたペスタロッチーの社会改革構想は、彼をして「玉座の上にあっても、木の葉の屋根の陰にあっても同じ人間」⁽⁹⁾ と言わしめた、その本質たる自然への信頼に裏打ちされているのである。

(2) 人間の本質における実存的危機への注目

しかしながら、ペスタロッチーは自然の善性を徹底化させたわけではない。なるほど『隠者の夕暮』に続く『リーन्हルトとゲルトルート (Lienhard und Gertrud, 1781-)』では、代官フンメルの影響によって墮落した村落共同体を救済するという物語のなかで、家庭生活を復活させ、単純で無邪気な感覚とそれに基づけられた自然の秩序を取り戻すことの重要性が説かれている。その限りにおいて、『リーन्हルトとゲルトルート』の思想界もまた、『隠者の夕暮』の構想を踏襲したものであるといえよう。

しかしマイヤー (Meier, Urs-P.) も指摘しているように、『リーन्हルトとゲルトルート』における村落共同体の墮落の要因を掘り下げると、それはフンメルの所業にのみ帰せられないのではないかと、むしろ単純で無邪気な人々の抱える問題が、悪の影響を助長してしまっ

たといえるのではないか⁽¹⁰⁾。

例えば、ゲルトルトの夫であるリーンハルトは、フンメルの経営している居酒屋に借金を重ね、その日のパンにも事欠く始末である。妻と子どもたちの涙に心を打たれるものの、フンメルの誘惑に抗うことができずにいる。「善良な心の持ち主であるが、妻と子どもたちとを不幸にしている」⁽¹¹⁾。また、ヒューベルルディの妻もまた、「最も善良な心を持った」⁽¹²⁾女性でありながら、「家庭における秩序を作る」⁽¹³⁾ことができず、家族をおろそかにし、自らをも不幸な状態へと陥らせている。

「心の善良な人間の受難」⁽¹⁴⁾は、最下層の民に限られたものではない。領主アーナーの祖父は権威を体現する將軍であり、勇敢で「善良な心を持つ紳士」⁽¹⁵⁾として語られているが、悪を主導する者たちによって欺かれ、村落全体に不幸をもたらす根本原因を作り出してしまう。

これら登場人物の設定に注目するならば、ペスタロッチーは『リーンハルトとゲルトルト』において、人間の自然を「楽観主義的に (optimistisch)」賛美する立場からはっきりと距離をとっていることがわかる。さらに言えば、善なるものの中にも潜む人間の弱さや危うさをあぶりだし、新たな人間学の地平を開いているといえよう。

このことは、『立法と嬰兒殺し (Über Gesetzgebung und Kindermord, 1783)』において、より切実な社会問題との対決という形へと焦点化される。『立法と嬰兒殺し』では、当時頻発していた未婚の母親による子殺しという事件の背景が語られている。

ペスタロッチーによれば、少女が「子殺し」へと駆り立てられるのは女性としての嫌悪感からであるという。しかし、その嫌悪感は女性の徳という点において不可欠の衝動であるため、それ自体は悪ではない⁽¹⁶⁾。問題は、少女を絶望させた不実な男であり、事件の真実に目を向けることのない立法や、未婚の女性の妊娠を一方向的に非難するような風潮である。善良な少女は、こうした境遇においてその弱さや危うさを露呈させてしまったともいえる。

ペスタロッチーは、人間の自然が実存的な危機を孕んでいること、そして危機にある人間は脆く、思慮に欠け、軽薄で猜疑的であることを直視する。それゆえに、彼の人間観は「悲観主義的な (pessimistisch)」ものへと転換したとして評価されることもある。しかし、危機への注目は人間の自然に対する信頼を欠くものではない。む

しろそれは、人間の弱さや危うさを克服するという発展の原理やそれに伴う内的な葛藤の発見であり、人間の自然に対する理解の深化にほかならない。

2. 人間の自然における発展の原理

(1) 人間の自然についての二極的理解

人間の実存的危機への注目は、ペスタロッチーの人間学に固有の表現形式を与えた。ブリュールマイヤー (Brühlmeier, A.) はこれを「人間学的二元論 (anthropologischer Dualismus)」として特徴づけているが、留意しなければならないのは、この二元論が「心理学的かつ教育学的一元論 (psychologischer und pädagogischer Monismus)」によって架橋されているということである⁽¹⁷⁾。つまり、統一できない二つの異なる状態は単なる対置の構図ではなく、一方から他方への連続的な発展という相関関係に照らして理解されなければならないというのである。

このことを踏まえて、トレーラー (Tröhler, D.) は「二極性 (polar)」という概念を用いる。「二極性」とは、「対立し合うが互いに規制し、補い合うに方向への実存の展開という対立関係」として規定されている。トレーラーはそこから、「二つの実存の矛盾」による相反的、対置的な意味と、「二つの実存の力が互いに及び、影響を与えること」という相関的な意味を見出している⁽¹⁸⁾。そして、人間の実存的危機やそれに基づく自然の発展の原理が次のように説明されるのである。

ペスタロッチーの人間学において、二つの極の一方は単純で無邪気な人間の自然であり、他方は、人間が本質的に内包する弱さや危うさを克服した、いわばより高い次元の自然であるといえよう。トレーラーによれば、ペスタロッチーが描き出す人間の発展は「放物線の経過 (der parabolische Verlauf)」を辿るものとされる⁽¹⁹⁾。放物線はその広がりにおいて無限性を、その頂点において有限性を、そして左右対称において相関性をあらわしている。

「放物線の経過」に譬えるならば、人間の自然における発展は、善性を保持している無邪気な自然という無限の始点から、まずは現実の墮落を経験することによって放物線を下降し、やがて頂点へ達する。ここでいう頂点とは、人間にとっての実存的危機を意味している。そして、まさにこの危機の頂点こそが、それを克服し上昇する放物線を辿って新たな自己の生成へ向かうのか、あるいは実存的危機を直視することなく、無限の墮落へと進

んでいくのかを決断する瞬間なのである。

(2) 『探究』におけるペスタロッチーの人間学

ペスタロッチーの人間学を最も純粹に、また体系的にあらわしたものといえば、『人類の発展における自然の歩みについての私の探究 (Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in der Entwicklung des Menschengeschlechts, 1797 以下、『探究』と略記)』であろう。そのなかでペスタロッチーは、人間を「自然状態 (Naturzustand)」、「社会状態 (gesellschaftlicher Zustand)」、「道德状態 (sittlicher Zustand)」の三状態において規定している。この三状態は、原初的狀態から文明化された生活へと進展した人類の前に、目指すべき理想的状态が打開されるという人類の發展史を意味するものであり、また幼年期から青年期、そして人生を包括して理想的境地を志向する成人期へという、いわば個人の人生史をも象徴している⁽²⁰⁾。

二極的理解に象徴されるペスタロッチーの人間学は、こうした三状態論におけるトリアーデ的連関のなかで説明される。以下、その構造を見ていきたい。

①人間の三状態論におけるトリアーデ的連関

ペスタロッチーによれば、「自然状態」はその内実において、「墮落せざる自然状態 (unverdorbener Naturzustand)」と「墮落した自然状態 (verdorbener Naturzustand)」とに二分される。前者は子どもがこの世に生まれてくる瞬間の、「不幸の印象が全く作用したことのないうようなとき」⁽²¹⁾に経験される状態を指している。しかしそのようなときは一瞬のうちに失われてしまう。それゆえに、「自然状態」とは本質的に、衝動の高まりや欲求の増大による墮落が始まるところの后者である。そして人間は、欲求を満たさんがために自らの動物的な力をいかに発揮する限りにおいて、「自然人 (der Naturmensch)」としてこの状態に留まり続ける。

しかしながら、「自然状態」にある人間の欲求はますます増大する。一方、その動物的な力には限りがある。そして、その不均衡においてなお欲求を満たそうとする力は、時に人類を抑圧し、搾取し、苦痛や絶望へと陥らせるようになる。ペスタロッチーはそこに「社会状態」の始まりを見るが、それは「万人に対する万人の戦い (Kriege aller gegen alle)」の継続として特徴づけられている。

なるほど「社会状態」の端緒にある人間は、「墮落した自然状態」において経験される「錯綜や困苦 (Verwicklung und Müseligkeit)」になお苦しめられている。しかし、やがて彼は自らの本質の頼りなさゆえに、「人類を導いて人類の力を結合させる」⁽²²⁾ことによって欲求を満たそうとし始める。ペスタロッチーは次のように述べている。

「家の戸口の前で殺されている人間を見ると、私の我欲はその瞬間に、彼を殺したように私を殺すこともできたのだという考えに私を導かずにはいられない。この考えは、彼も私も、誰も殺さなければよいという第二の考えを呼び起こす」⁽²³⁾。

ここでいう第二の考えは、他者の「我欲 (Selbstsucht)」への不安から自己自身を守るために生じたものである。この不安ゆえに人間は他者との結合を求め、契約や法といった組織化された生活の秩序を築き上げようとするのであり、社会的結合の目的に合致するような権利や義務もまた設定されるのである。

こうして人間は「戦い」による激しい動揺を回避し、安定した「社会状態」を確保するに至った。しかしペスタロッチーによれば、まさにこの地点において、人間本質の実存的な危機もまた示されるという。彼は次のように述べている。

「人間は、社会状態においてその目的を果たすために、自然状態において彼の本能を満足させるために用いたのと同じ動物的な力以外の手段を用いるわけではない。しかしこの力は、彼の動物的墮落によってすでに、彼がこの状態に至る前から弱くなっている。社会的秩序のための方策も、決してその力を回復させられない。反対に、これらの方策は自然状態の無邪気な快さを本質的に失わせ、彼の全能の気楽さを破壊する」⁽²⁴⁾。

すなわち、人間は「社会状態」にあってなお動物的な自然の力に拠っているのであるが、その力は組織化された生活の秩序や社会的権利のために「畸形化 (Verstümmelung)」されている。ゆえに彼は、動物的な自然の力を無邪気に働かせることができず、またそれ以外の方策を見出すこともできず、激しいジレンマに陥ることとなる。ペスタロッチーによれば、人間は決して激しい葛藤のなかに安住することはできないという。引き裂かれるような感情の鬱積は、やがてそこから脱したいという強い衝動を生じさせるが、ここにおいてペスタロッチーは、人間の実存的な危機による転回点を見出すのである。そして「社会状態」における葛藤や矛盾を

その根本において超克する、「道徳状態」への発展の契機は、まさにこの転回点に求められる。

②「内的醇化」による「道徳的自立」

ペスタロッチーによれば、「道徳状態」への発展は次のように説明される。

「(人間は)、社会的には相互に相手の道徳を全く信じることなしに生きざるをえない。しかし、このような不信の只中において、私の心の奥底には道徳への欲求があらわれる。それは、私が自分の心次第で、自然や人類が単に動物的、社会的存在として私を形成する以上に自己自身をより高貴な存在へと形成することができるのだという感情へと高めてくれる」⁽²⁵⁾。

このことから明らかなように、「道徳状態」とは人間自然の最も崇高な次元として位置づけられている。そしてそこへと至るには、「自然状態」から「社会状態」への連続性のように「自然的発展に保証された」⁽²⁶⁾道筋ではなく、<私 (Selbst)>自身が自らの意志でそれを求め、葛藤や矛盾を抱えた自己自身を離脱し、いまだ打開されたことのない高みへと飛躍するような、非連続性を乗り越えなければならないとされる。このような非連続の契機を含み込む「道徳状態」への発展の原理を、ペスタロッチーは「内的醇化 (innere Veredelung)」と呼び、それによって新たに生成される自己の像を「道徳的自立 (sittliche Selbständigkeit)」として特徴づけている。

ここで注目されるのは、ペスタロッチーのいう「自立」が、カントの哲学における「理性的意志 (vernünftiger Wille)」に共鳴しつつもその立場とは一線を画しているということである⁽²⁷⁾。なるほどペスタロッチーは、「自立」への過程には「意志」による自己克服の努力が必要であることを説いた。しかし彼の理解では、「道徳的自立」へと導く「内的醇化」を可能とするものは、「理性的意志」などではなく、「宗教の本質が基づくところのもの」と同一の情調⁽²⁸⁾、すなわち、「好意 (Wholwollen)」から芽生える「愛 (Liebe)」なのである。

宮本が「その愛とは共同体のうちのみ存在する」⁽²⁹⁾と述べているように、『探究』におけるペスタロッチーの人間学は、社会の関係性から自己を切り離すところの個人の「自律 (Autonomie)」ではなく、関係性のなかで道徳的な主体としての自己を完成させていく「自立 (Selbständigkeit)」を問題にしている。それゆえにペスタロッチーの理解にあっては、「愛」に基づいて自己を

完成するとともに、森川が指摘しているように、同胞への顧慮が企てられ「他者の幸福に奉仕しようとする」⁽³⁰⁾こともまた、道徳的に自立した主体の在り方として語られるのである。

3. 孤児救済の実践に見るペスタロッチーの人間観

(1) 孤児たちの「道徳的自立」を支えたもの

『探究』において展開された人間学は、「内的醇化」による「道徳的自立」に収斂されるころの人間、さらに言えば、「社会状態」における葛藤や矛盾を「愛」に基づいて克服し、道徳的な主体として、同胞への「愛」を企てていくような人間を、人間の「あるべき姿：当為 (Sollen)」として描き出している。なるほどそれは、ペスタロッチーの夢にすぎない。しかし彼は続く生活のなかで、この夢を追求した。そして次のことを確信したのである。すなわち、どのような人間であっても「道徳的自立」へと至る道は開かれており、その歩みを可能とする力が備わっているということである。

ペスタロッチーがこのような確信を抱くに至ったのは、社会に放置された子どもたちと過ごした日々の経験において、すなわち、シュタンツの孤児院の実践を通してであった。子どもたちは彼に、人間性の危機に瀕していても「愛」は確かに存在すること、それは「環境の泥土 (Schlamme dieser Umgebungen)」⁽³¹⁾に埋もれているだけであり、決してその力を失ってはいないことを示したのである。

ペスタロッチーの確信は同時に、埋没する「愛」の力をいかにして目覚めさせるのかという問いを包含するものであった。そこで彼は、子どもたちがその心の奥底に沈殿させている「環境の泥土」を浄化することから開始したのである。例えば、子どもたちの空腹を彼らの健康に配慮した食物でもって満たした。そして彼らの身体を清潔にし、洗濯の行き届いた衣類を身につけさせた。また、安心して眠ることのできるベッドも用意した。孤児院の開設当初において着手された試みは、子どもたちの当たり前の欲求をひたすらに満たしていくものであったが、まさにそれこそが、彼らの心の奥底に眠る内的な感情を揺り動かしていったのである。

ペスタロッチーはシュタンツにおいて、人間の自然における発展の原理を教育実験によって確証し、一般に適用可能な方法論として示そうとした。彼が対峙した子どもたちは、その動物的な力をもって「我欲」を満たそうともがき、それがかなえられないことの苦痛に自己自身

を引き裂かれていた。しかし放置された彼らは、実存的な危機にありながらも、それを「道徳的自立」への転回点とすることはできない。なぜなら、彼らのうちには「愛」が、すなわち「内的醇化」を可能とする力がいまだに目覚まされていないからである。ゆえにペスタロッチャーの方法論は、「道徳的自立」への架橋のみを問題とするものではなく、子どもたちの境遇や人間関係の改善を含んだ、「生活（生：Leben）」の全体にかかわっているのである。

(2) 「道徳的自立」と互恵的關係

子どもたちのうちに「愛」や「善行（Wohlthätigkeit）」の一端が見え始めると、ペスタロッチャーは彼らがそれを確実に、また孤児院の關係性のなかで広く実行できるよう、彼らの技能を鍛えなければならぬと説く⁽³²⁾。ここでいう技能とは、「愛」や「善行」を実現するために不可欠の態度や習慣を形成するものであるが、このような態度や習慣を身につけていく際には、自らの欲求を抑制したり、外的な規律や秩序に自らを従わせたりしなければならぬこともある。その限りにおいて、技能の鍛練には「克己（Selbstüberstimmung）」への努力が求められるのである。

道徳的な主体として完成が「愛」に基づく自己克服の努力によって可能となるならば、子どもたちの道徳的な技能を鍛えることは、彼らを「自立」へと促す実際の有効な方法であるといえよう。しかしペスタロッチャーの主張は、それを示すにとどまらない。ここにおいて彼は、子どもたちを「自立」へと差し向けるもう一つの要素に言及している。それはすなわち、他者との關係である。

例えばペスタロッチャーは、シュタンツの子どもたちに次のように問いかけている。

「私が貧しく不幸な人々の仲間なかで生活しているように、おまえたちもまた彼らを教育し、教養のある人間にしてあげたいと思わないだろうか」⁽³³⁾。

「アルトドルフの町が焼けてしまった。（中略）おまえたちはこの子ら（焼け出された子どもたち）のうちの20人ばかりでも私たちの施設に引き取ることを、慈悲深いわが政府にお願いしてみようとは思わないか」⁽³⁴⁾。

これらの問いは、子どもたちを他者への奉仕へと促すものである。しかしながら、シュタンツの子どもたちもまた社会の底辺に放置された存在である。そして現実には、ペスタロッチャーがいう「貧しく不幸な人々の仲間」とは彼ら自身やその家族が意味されているのであり、アルト

ドルフの子どもたちにとっては、シュタンツの孤児院に収容される以前の彼ら自身の姿でもあった。ペスタロッチャーとの生活のなかでいくらかは改善されてはいるものの、他者による保護や援助を必要としているのは彼ら自身もまた同じなのである。

その限りにおいて子どもたちは、自らの無力を日々痛感していたであろう。また、孤児院のなかでは自らの価値を確かめられていたとしても、それを越えた關係にあってはどうだろうか。いやそれ以前に、孤児院を離れたところでの他者とのつながりやより広い社会の關係へと自らが参加するということが自体に思いが及ばないのかもしれない。

このような子どもたちに対してペスタロッチャーは、「いつまでも貧しいままではいなく、いつかは身につけた知識と技能をもって同胞のなかに入り、彼らのために役に立ち、また彼らの尊敬を受けることができる」⁽³⁵⁾と諭すのである。その「見通し（Aussicht）」は、何にもまして子どもたちを感動させ、奮い立たせたという。そして彼らは、アルトドルフの事例が示すように、時に自己犠牲をいとわぬような献身を示すようにもなった。

他者の苦しみを分かち合いながら自らの弱さを乗り越えるという意味において、献身は究極的な自己実現の在り方であるといえるだろう。ペスタロッチャーのいう「道徳的自立」が「他者の幸福ために奉仕しようとする」主体の在り方として語られるのも、われわれの自己実現が他者との間にこのような互恵的な關係を築き上げることによって初めて到達される地点であるからにはほかならない。

結びにかえて—教育と福祉の人間学—

以上、ペスタロッチャーの人間学を、『リーンハルトとゲルトルート』に代表される初期の著作群と『探究』、及びその思索を検証したシュタンツの教育実践を中心に概観した。結果、彼の人間学の特徴は次のようにまとめられよう。

- ・人間はその自然の内的感情を基礎として発展する存在である。初期の著作群では、人間の自然が「樂觀主義的に」賛美されているようだ。しかし、ペスタロッチャーはやがて、人間の自然の善性に基づいた予定調和的な人間觀から距離をとり始める。
- ・人間はその本質において根源的な弱さや危うさを抱え

ている。それは時に、自らを墮落させ苦しめる。困窮や苦難は、しばしば彼をその実存の危機に直面させる。

- ・しかし実存的危機は、それを乗り越えようとする事によって、人間をより高い次元へと発展させる。ペスタロッチーの人間学は、これを「内的醇化」による「道徳的自立」として捉えている。
- ・「内的醇化」とは、葛藤や矛盾を抱える人間が自らの意志でそれを超克しようとする過程を意味している。それは連続的、段階的な過程ではなく、自己自身を滅して再生するような非連続性において特徴づけられる。
- ・「内的醇化」とは自らの意志による自己克服の努力であるが、ペスタロッチーはそれを可能とする力を、「好意から芽生える愛」に求めている。人間は他者との関係性のなかでこそ、道徳的な主体として自己自身を完成させることができる。その意味において、「道徳的自立」の具現は他者への奉仕や献身として語られる。
- ・「道徳的自立」とは、他者と間に築き上げられた互恵的関係を基盤にして達成される、究極の自己実現である。

このように見てくると、ペスタロッチーの人間学には、後の実存主義的教育学⁽³⁶⁾へと連なる思想が萌芽的にあらわれているように思われる。しかしながら、教育家ペスタロッチーの名を一躍世に知らしめることとなった「メトデー (Methode)」が、認識の連続的、段階的な発展を前景に取り上げていることから、例えば心情陶冶 (Hezbildung) においてあらわれてくる非連続的発展の評価はこれまで正当になされてこなかった。ペスタロッチーの人間学を実存思想と結びつけて解釈することには異論もあるだろうが、生身の人間の悪や醜の姿から目をそらすことなく向き合い、導き出した論理には、「～主義」の枠組みを超えて学ぶべきことがあるのではないか。そのような意味において、ペスタロッチーの人間学はある種の普遍性を有しているといえよう。

このことは、ペスタロッチーの人間学の意義が、教育の論理の範疇からはみ出したところでお評価されることからも明らかである。生活世界と非暴力の思想の統合化によって福祉哲学を構築するという試論を展開した加藤は、その意図を明らかにするなかで、社会福祉に関わろうとする者の動機について言及している。そして、「社会権的生存権」を普遍的に保障するという「正義」と「連帯」の思想があることを指摘したうえで、さらに

その権利の根底には何があるのかを問うている⁽³⁷⁾。

加藤によれば、それは「『苦しんでいる人たちに対して、安定し余裕のある有能な人が援助をしてあげる』という自己満足の欲求ではなく、『苦しんでいる人から自己実現の相互性 (reciprocation) を教わる』という意志」⁽³⁸⁾ではないかという。「教わる」といっても、苦しんでいる人は「悟った人」ではない。しかしその苦しんでいることこそが、人生で最も「実存に真向かう」瞬間である。われわれは受苦を通して自己実現に向かい、新しい人格の発展へと自己を開いていくのである。

加藤はヴェイユ (Weil, S.) の言葉を援用し、われわれが受苦の人に寄り添い歩むことを「共受苦」⁽³⁹⁾を生きることと呼び、それは人間の「より深い究極の自己実現の欲求 (マズローが自己超越の欲求としたもの)」⁽⁴⁰⁾ではないかと論じている。それはまさに、ペスタロッチーのいう「道徳的自立」の哲学に通底する論理である。

そうとなれば、基礎陶冶 (Elementarbildung) として展開されるペスタロッチーの思索や活動の成果を、社会福祉の哲学として読み解くこともまたできるのではないか。そしてそこには、教育と福祉という人間の営為を根底において結びつける原理が見出されるのではないか。その原理の究明については、今後の課題としたい。

注及び参考文献

- (1) 小川未明文、酒井駒子絵『赤い蠟燭と人魚』偕成社、2007 (初版 2001) 年、及び小川未明『小川未明童話集—赤いろうそくと人魚』新潮文庫、2003 (初版 1951) 年を参照されたい。この物語に登場する老夫婦は信じやすい善良さゆえに騙され、欲に抗うことができなかった。ペスタロッチーが見つめた人間の根源的な弱さや危うさを、彼らもまた体現しているといえよう。
- (2) 児童雑誌「赤い鳥」は、大正デモクラシー思潮の影響下にあった 1918 年、鈴木三重吉によって創刊された。協力者には北原白秋、泉鏡花、高浜虚子、小川未明、芥川龍之介ら作家のほか、作曲家の山田耕筰、画家の山本鼎らがいた。当時の文壇で活躍していた作家らの童話や童謡、児童詩、自由画と同時に、購読者らが投稿した作品が選定され掲載された。
- (3) Pestalozzi, J.H. : *Sämtliche Werke*, Kritische Ausgabe, hrsg. von Buchenau, A., Spranger, E., Stettbacher, H., Berlin 1927-56, Zürich 1968-78, Bd.13, S.6.
- (4) 奥平康照「人間観 (ペスタロッチーの)」日本ペスタロッチー・フレイベル学会編『増補改訂版 ペスタロッチー・

- フレーベル事典』玉川大学出版部, 2006 (初版 1996) 年, pp.217 ~ 219 を参照されたい。
- (5) Pestalozzi, a.a.O. Bd.1., S.266.
- (6) Vgl. Spranger, E. : *Pestalozzis Denkformen*. Heidelberg 1959. (吉本均訳『教育の思考形式』明治図書, 1962 年).
- (7) Pestalozzi, a.a.O. Bd.1., S.271.
- (8) ditto, S.270.
- (9) ditto, S.265.
- (10) Vgl. Meier, Urs-P. : *Pestalozzis Pädagogik der sehenden Liebe, Zur Dialektik von Engagement und Reflexion im Bildungsgeschehen*. Bern und Stuttgart 1987, S.315ff.
- (11) Pestalozzi, J.H : *Sämtliche Werke*, Bd.2., S.13.
- (12) ditto, S.247.
- (13) ditto, S.247.
- (14) Pestalozzi, a.a.O. Bd.3., S.322.
- (15) Pestalozzi, a.a.O. Bd.2., S.219.
- (16) Vgl. Pestalozzi, a.a.O. Bd.9., S.27.
- (17) Vgl. Brühlmeier, A. : *Pestalozzis Lehre vom Menschen*. In : *Johann Heinrich Pestalozzi, Denker—Politiker—Erzieher*. hrsg. von Brühlmeier, A. und Jost, L. S.11ff. Zürich 1977, S.23.
- (18) Vgl. Tröhler, D. : *Philosophie und Pädagogik bei Pestalozzi*. Bern und Stuttgart 1988, S.16ff und 48.
- (19) Vgl. ditto, S.106ff.
- (20) Vgl. Pestalozzi, a.a.O. Bd.12., S.107.
- (21) ditto, S.73.
- (22) ditto, S.9.
- (23) ditto, S.74.
- (24) ditto, S.76f.
- (25) ditto, S.106.
- (26) Meier, a.a.O. S.330.
- (27) 宮本要太郎「ペスタロッチーの教育思想における『自立』概念についての一考察」『教育哲学研究』第 55 号, p.52, を参照されたい。
- (28) Pestalozzi, a.a.O. Bd.12., S.130.
- (29) 宮本, 前掲論文, p.52.
- (30) 森川直『ペスタロッチー教育思想の研究』福村出版, 1933 年, p.127.
- (31) ここでいう「環境の泥土」とは、孤児たちの境遇を抽象的に表現したものである。彼らはその人間性をかえりみられることなく、身体の不健康はもちろんのこと、飢えや貧しさによって心も押しつぶされていた。このような劣悪な環境と、孤児たちがいわば自らを守るために作り上げた心の壁を、ペスタロッチーは「泥土」に譬えたのである。
- (32) Vgl. Pestalozzi, a.a.O. Bd.13., S.14.
- (33) ditto, S.15.
- (34) ditto, S.16.
- (35) ditto, S.15.
- (36) 諸富によれば、自ら「実存主義」と称する文字通りの実存主義は、第二次世界大戦直後のフランスでサルトルやメルロ＝ポンティが展開した思想運動に限定されるが、教育思想との関係で重要な意味を持つ広義の実存主義は、キルケゴールやニーチェに思想的源流を求めることができる。また、ヤスパースやハイデッガー、マルセルらもこの流れに位置づけることができる。しかし、教育学における実存思想の導入に最も貢献したとされるのは、ボルノウ (Bollnow, O.F.) の『実存哲学と教育学』であろう。ボルノウは同書において、人間の生の進行を突如中断させるような非連続的な事象に注目し、その事象を通してのみ可能となる生の根本的な転回が存在することを指摘した。その際、この非連続的な教育事象の「発見原理」として実存哲学に依拠したとされる。(諸富祥彦「実存主義」教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房, 2000 年, pp.340 ~ 342.)
- (37) 加藤博史『福祉哲学—人権・生活世界・非暴力の統合思想—』晃洋書房, 2008 年, ii, を参照されたい。
- (38) 同上
- (39) 大木権『シモーヌ・ヴェイユの不幸論』勁草書房, 1969 年, p.74, を参照されたい。
- (40) 加藤, 前掲著, iii.
- 付記) 本研究は、平成 21 年度日本学術振興会科学研究費補助金 [若手研究 (B)・課題番号 20730517] の交付を受けた。